

13. 総括—属性論の射程

2025. 7.11. 大橋 幸泰

0. 属性論とは何か

- 一個の集団も一人の個人も、単一の属性では成り立たないことを意識して歴史を見る方法
- 身分は尊卑上下の観念を伴うが、属性は単純に帰属先を意味する
- *属性に尊卑上下の観念が加わると身分に転化

1. 属性論提起の経緯

属性論提起の契機

- 『〈江戸〉の人と身分』全6巻(吉川弘文館、2010～2011年)の編者として、全巻の議論をまとめる役割
人の格差みならず地域差など、あらゆる事象に尊卑上下のコードがついていることを意識する身分論
→キリシタンのような異端的宗教活動も該当することに気づく
→身分論には、治者に公認されることが身分の成立要件と考える集団論とは異なる視角も必要
→個としての身分という捉え方
- 自分のキリシタン史研究から、内在的に考える視角の必要性を自覚
最初の論文集『キリシタン民衆史の研究』(東京堂出版、2001年)／「異宗」「異法」という呼称に注目
*潜伏キリシタン存続の外在的条件の追究
→内在的条件の追究が必要との自覚／キリシタンは信徒としてのみ近世を生きていたのではない
→キリシタンであると同時に寺院の檀那、農民・漁民・商人・職人などでもある／村も近世村落の一つ
→潜伏キリシタンが存続した理由／キリシタン以外の属性を優先した結果

2. 属性論の立場

- 同じ人間の中に、多くの属性が重層的に重なり合っている
- 「生活の専門家」という民衆像を属性論に当てはめる／生活者というのも一つの属性
- 生活者／治者・被治者区別なく、あらゆる人々が共通に保持している属性
- しかし、治者よりも被治者の方が、マジョリティよりマイノリティの方が、生活者の立場で物事を考えたり、行動したりする傾向が強い
- すべての人間に共通の属性である生活者の視点が、もっとも客観的
- *客観性とは、様々な立場を並べることではない

【参考文献】

- 大橋幸泰『近世潜伏宗教論—キリシタンと隠し念仏』校倉書房、2017年)
- 大橋幸泰「民衆思想と民衆運動」(牧原成征編『日本史の現在4 近世』山川出版社、2024年)
- 大橋幸泰『近世日本邪正論—江戸時代の秩序維持とキリシタン・隠れ／隠し念仏』(勉誠社、2024年)

【付記】

- ・明日までに、Waseda Moodleにて講義記録の提出を求める。
- ・小レポートを提出した者が試験(7月18日)の受験資格を有する。